

# 太 棹



リ志

第百十六號



傾城頭

東京 太 棹 社 發行

閑 静

スウハ・アウルシ

高 級

蒲田區御園町二ノ一四  
電話蒲田三六二一 番

松 幸

すき焼

和洋御料理

浅草公園 (千束二ノ三四)

牛鍋本店

電話根岸 (87) 〇三八〇番  
二〇〇〇番

風流・金ぶら・茶漬

【美地旬】

去月屋

新橋二ノ八  
電銀二〇八

# 素義界を去る近江清華氏



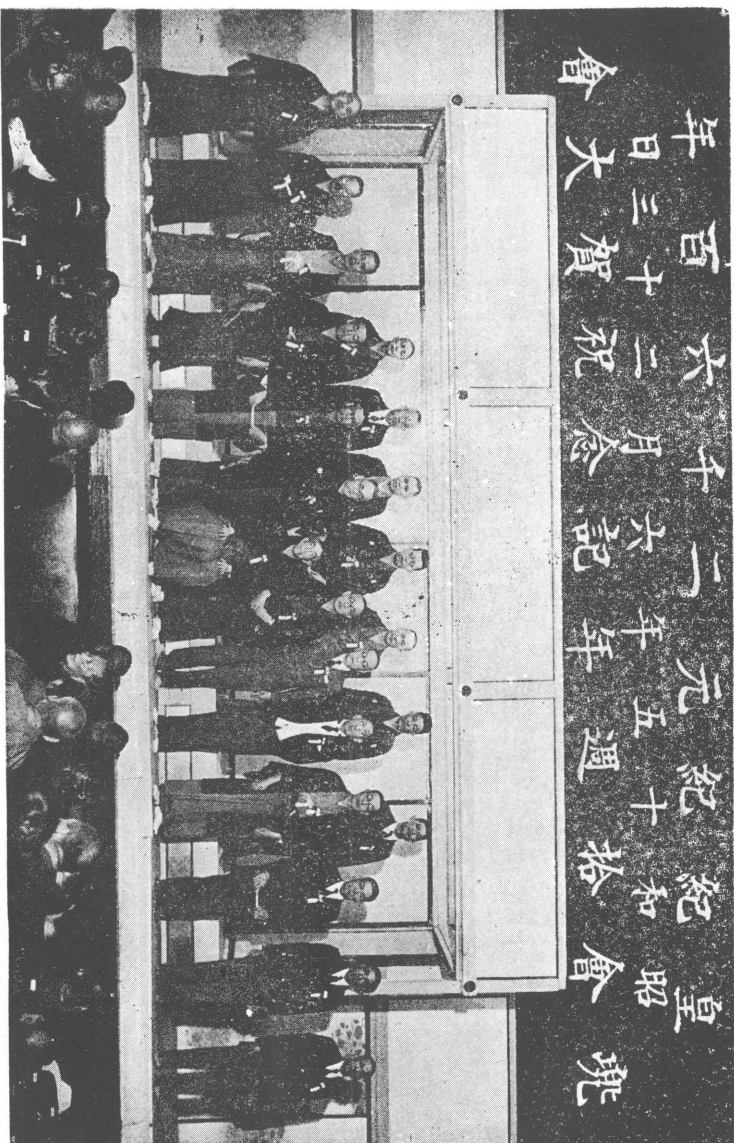
帝都素義界の巨星近江清華氏は感ずる處あつて、兜會十週年記念大會を最後に、素義界より遠ざかる事になつた。

氏は温厚篤實信義を重んじ、その情熱の籠つた藝風は聴衆をして感激させずにはをかなかつた。六月廿三日日本橋俱樂部に於ける兜會十週年大會には、鶴澤觀西翁の絃で『忠九』を語られたが、素義界を去る決意のあつた此最後の『忠九』は、嘗てない最上の出来榮えで、それかあらぬか絃もしんみりと聴こえ、氏の決心を私かに知る記者は、何か知ら胸を打たるゝものがあつた。

氏の淨曲界に盡された事は文樂座東上の際と言へ、東都素玄界に亘つてその功績甚大なもので、氏の素義界を去らるゝ事は各方面から惜まれてゐる。



# 兜會十週年紀念祝賀大會



前列向て右より 〓 本多可笑、米學春樂、笠松蝶、加藤兜、桑原  
 略美、福田喜輝、中澤巴、鈴木和樂、鈴木松寶、近江清華、寺岡三  
 幸、中山美浪、北村三葵、中里もみぢの諸氏

後列向て右より 〓 玉棟喜慶、本多加保留、藤田其晶、松田和可葉  
 根本國壽、荒木泉、淺原朝正の諸氏



# 引退御挨拶

近 江 清 華

兜會十週年記念も、無事盛況裡に終了、私も、今は何等、憂艱なく、金蘭の契に、惜別し得ることと信するのであります。「素義界を去るに臨み」を草し、淨曲界一切から去る決意をいたしましたのは、四月初旬でありました。

偶々、例の不快極まる事件も絡んで、引退の心に拍車をかけたことは事實でありましたが、既に、「素義界を去るに臨み」のなかで披瀝いたしました如く、そのみが全部の因ではなかつたのであります。

更に、私の偽りない心境をここに告白し、以つて、大方の御賢察を得たいと存するのであります。

天狗雜誌事件直後、諸先輩知友の厚誼に據つても、私の過去の憤懣は一掃したつもりであります。

しかして、この御友誼を無視し、蝸角の争に、偏頗な心情忘じ難き結果の行動でないことを、再びここに、申添へる次第であります。

兜會、九重會、其他の方々の望外の御厚情に接し、且つ、遠く京阪の知友にまで思はぬ御支援慰藉を受けるに至つたことは慚愧に耐へぬ次第にて、既に定めた引退の決意をも、他意あるかの如く忖度を受けはせぬかと思ひ惑ひ、爲めに、再び、私自身去就に困却するに至つた程であります。

この管飽の御厚情は、既に、數年前より、心中を去來してゐた引退の思ひを、更に、更に、深い苦惱に追ひ込んでしまふたのであります。

しかし、私は、あの事件が、決して、私の引退を決する最大の因ではなかつたといふことは、六月二十三日の十週年記念大會に際して、心より自分の責務を雀躍として、果させて頂いたことによつても御了解願ひたことと考へるのであります。

私は眞實、心樂しく、目出度き大會を迎へ且つ、おくつたのであります。

私は今、偽りなく自分の心裡を告白披露したいと感ずるのであります。

うちつづいて肉身をうしなつた私。最愛の男子につづいて、もつとも力としてゐた姉をうしなつた私。

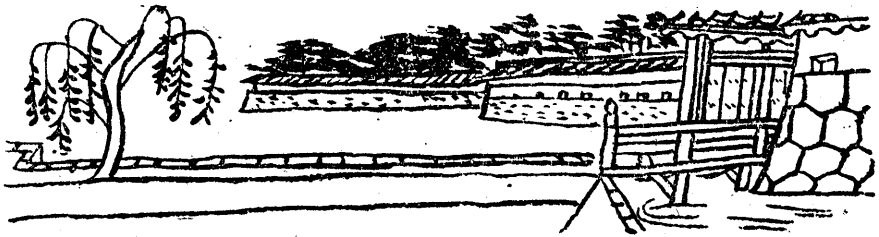
虧益の世と申しませうか。この肉身の不幸、斷ち難き惆悵の情。北叟馬を失ふ——といふ言葉がありますが、去來する幸、不幸は、實際私の氣力をさへ、一時喪失させたのであります。

私はしばらく、孤獨となり、再び、眞の力を心裡に取戻し、復活せしむるまで、何事からも遠ざかり、明窓淨几の心境をもつて、非才に鞭打ち、せめて、本務にだけ、今後の自己を捧げたいといふ念のみ切であつて、敢て、過日の事件に拘泥しての行動でない——といふことだけは御了承願ひたいのであります。

今日に至りましては、私の引退の決意のなかに、只今申述べました如く、何一つ低迷する雲もなく、些さかの他意もないのであります。

諸賢の益々、御自愛御健闘を祈り、今日に及ぶ鮑叔友誼の御厚意に對し、感謝の意を捧げ、倍舊の御教導御叱正を懇願する次第であります。

七月一日記



## 太 棹 第百十六號 目次

座主の出雲と操り劇の組立	……………	是澤九似廬	……………	(四)
明治時代近松研究の先驅者	……………	中野三允	……………	(一〇)
鎌倉三代記 (義太夫解説三)	……………	川口子太郎	……………	(一四)
素義界を去る近江清華氏	……………	栗原千鶴	……………	(一八)
塵外居放談	……………	鈴木松實	……………	(一九)
義太夫論	……………	煙亭	……………	(二〇)
ラヂオ淨曲漫評	……………	新藤泰觀	……………	(二〇)
素義人描影	……………	金王丸	……………	(二三)
太棹社彙報	……………	内田富太郎	……………	(二五)
淨界消息	……………		……………	(二六)
當座帖	……………		……………	(三〇)
編輯後記	……………	芳河士記	……………	
寫眞	……………	素義界を去る近江清華氏・兜會十周年大會	……………	
表紙・カツト	……………	宮尾しげを	……………	



# 座主の出雲と操劇の組立 (一)

是 澤 九 似 廬

出雲は、竹本座（西の芝居の始祖）竹本義太夫の知友であつた、竹田近江の次男で、名は清定、出雲は雅號、大阪千日前に住居があつたから別號を、千日軒とも稱して居た、父の近江は、絡繰細工の發案製作で成功して、巨萬の富を作つた人、義太夫から竹本座人形淨瑠璃劇の經營一切を譲りうけて興行を思ひ立ち、悻の出雲を新座主に据ゑ、自分が後見役でこれまでの組織を改革して、觀衆本意で華々しく開演したのは、寶永二年三月二日初日で、外題は「用明天皇職人鑑」で、太夫、竹本筑後椽（初代の義太夫）、三味線、竹澤權右衛門、人形、辰松八郎兵衛、座付作者、近松門左衛門の外に、當時人氣のあつた一流藝人ばかりを網羅した上に、人形衣裳の新調、舞臺の莊麗、道具の改善、嶄新な興行振り、その豪華版は、大阪中の人氣を煽つて、大當りを取つた。

出雲は、享保頃から淨瑠璃の作者を兼ねて居り、創作が三十幾編もあるが、その中で代表作は、「假名手本忠臣藏」「菅原傳授手習鑑」「義經千本櫻」「ひらがな盛衰記」「大塔宮職人鑑」「蘆屋道滿大内鑑」「小野道風青柳硯」「双蝶々曲輪日記」

の八編ぐらいで、他にも優秀の作品もあるが、今でも劇に仕組れて顯著のものは、まづこれらの作かと思はれる。出雲は寶曆六年に没して居るから、座主の間が、四十九年であり、この長年月にはいろ／＼の曲折波瀾もあつたが、世人の嗜好に對しての觀察眼が鋭敏なために、自分の理想に焦せらずと漸進主義の興行方針で、流行に一步／＼と先駆して、新鮮味をもつて觀衆に、人形劇の趣味を開發指導した呼吸は、流石に出雲ならではと首肯せられ、他の興行を威壓して、操劇の全盛期を創り上げ、藝を向上發達させた努力と、その功蹟の偉大さは、前後二百五十年間に於ける、唯一の興行仕打方として、推獎を惜まぬ次第である。

## 近松と、出雲との作の環境

大近松が、後半期になつて書卸した、大阪純眞世話の人情物の味、心中物が人間本性の持つ眞想の告白（近松の持つた藝術家としての人生觀）を、情の時代とすれば、出雲の作は智の時代とも視らるゝ譯で、近松の流露する自然の文字は、

天地と呼吸を同ふした、人生の感傷を、あらはに徴象した詩であり、出雲は、興行師と云ふ建前で、骨の髄まで眞の詩人とはなりきれず、錢の勘定を忘れることが出来得ぬ悩みが、心のどこにか潜んで居たものと觀るべきで、この通俗化した作家出雲の氣持が、却て人形芝居をして、あれほどまでに發達させ、藝の向上を促したこともなつたと思はれるのである。我等は、出雲を作家として見るよりも、理想の興行師として眺めたい氣持ちがする。

大近松歿後は、戯曲としてあの巧緻な描寫と、精神的の内容が段々と稀薄になつて來て、今度は、出雲、半二、宗輔、松洛などの作が變つた意味で、構想美の雄大さと、技巧主義の艷麗さが一般の觀衆に嬉ばれ、つぎには、文耕堂などの誇張主義の形式美に變遷して、藝術としては墮落した感がある。

之は大近松の作に比して、出雲、松洛その他の作品が、凡て觀衆本意となり、内容よりも外觀美に捕はれ過ぎた結果で恰も、錦繪式の操芝居に轉換し、之を翫賞する一般の目には眞に綺麗に華やかに彩られて、着想の雄大さに、感興の湧き立つことを覺えさすも、藝術的に解剖した價値は、到底、大近松の自然の偉大さには對比すべくもなく、藝術家としての信念に整備を缺ぎ、たゞ時代の流れに沿ふて、觀衆の希望のみに同化したことを否む譯にはゆかぬ。

### 義太夫節の變遷と、作曲進歩の程度

淨瑠璃節は素と、箏曲、地謡、謡曲、古樂、豊後節、説教

節、金平節、祭文節、などを基調として作曲せられたもので義太夫節の始祖、初代竹本義太夫も、始めは井上播磨椽の門に入つて淨瑠璃節の教へをうけ、その瀟灑修得に辛慘を嘗め後に京都に上つて、宇治加賀椽の一座に加入して、他流の秘奥を探り、その長を把り、短を捨て、之を折衷して、自分の獨創の考案を加味した、一流を編み出して、その抱負を世間に問ふた譯で、この新曲創作に天稟ある革命兒は、大阪の僻邊、天王寺村に生れた百姓の倅であり、本名を五郎兵衛と云ふ青年で、親譲りの田畑と、鉄鋤を擲つて、義太夫節の完成に六十餘年の生涯を捧げた努力と眞勇、竹本筑後藤原博教と云ふ官名を拜受するまでは、悪戰苦闘を繰り返した歴史なのである。

義太夫の三絃をつとめた、尾崎權右衛門は、泉州尾崎の出身で、京都の宇治加賀椽座付の三絃彈であり、義太夫と同座して居て、肝膽相照した友情から、同座を脱退して義太夫の創業を佐けて、大成せしめた人であり、竹澤と改めたのは、竹本義太夫の「竹」の字と、淨瑠璃節作曲の祖、澤住檢校の「澤」から取つたものと云はれて居る。

豊太閤が聚樂亭で觀覽したと云ひ傳へのある、西の宮の傀儡師が遣ふた人形は、勿論、粗末で小さな一人遣ひのもので之を語つた、虎屋治郎右衛門(後の淨雲)時代の淨瑠璃節は今からは想像もつかぬほどの散漫粗笨のもので、桃山期の餘影を曳く、寛永頃までの風俗史、風俗畫などに遺る資料によ

つて見ても、立派な藝術とは云へぬ程度で、官名のある檢校などの節付した關係で、河原物や、大道藝に比較しては、品格もあつたと思はれることは、この當時は戰國時代からの、英雄崇拜の人心と勇武の氣風が、武士は勿論のこと、女性にまで遣つて居り、商家にしても商魂があつた關係からして、當時の淨瑠璃節は、自然に荒げぶりのもので、激越な豪傑物語式に節付して語つて居つたものと觀るべきで、その後になつて流行した、宇治流、井上流の淨瑠璃は、節廻しが聊か優美流暢に變遷したものと思はれる。

徳川氏の寛文後の平和政策に、段々と慣れ馴染んで來た民衆の反影は、藝術にも及ぼして來るのが當然で、淨瑠璃節が民衆の娛樂機關として哺くまれて、生長發達して、一つは江戸で薩摩太夫の門下から數派に別れて、江戸淨瑠璃の基礎を完成し、一つは關西に遣つて大阪に義太夫節として根城を据へて發展したのである。

義太夫が、過去の流派に飽き足らず、新流作興の決心で、大阪道頓堀に櫓を建てた、貞享二年二月初演は、大近松が宇治加賀椽のために書卸した「世繼會我」で、一座の太夫は、陸奥茂太夫、竹本頼母太夫、竹本内匠太夫、竹本難波太夫で三絃は、竹澤權右衛門、大西藤四郎、人形遣、辰松八郎兵衛で義太夫は、序切、二段目切、三段目切、四段目切、五段目切、の各切場の全部を一人で語り、他の太夫は端場を語らして居る、義太夫が、いかに達者であつたとしても、骨の折れ

る切場五段を一人で語ると云ふことは、當時の節付が、まだ、進歩して居らず、幼稚の範圍を出て居なかつたことをも實證せらるゝと思ふのである。その後十六年たつて、元祿十四年五月「筑後椽博教」拜領の披露興行には、近松の書卸した「蟬丸」の切場三段を一人で語つて居る、義太夫はその時に年齢が五十一歳であり、在來は多く修羅場や、物語式の節物を得意として居り、この興行の「蟬丸」は、藝に一進境を示したと云はれて居り、別して、道行が好評を拍したと稱されて居る。この當時の義太夫は、藝に油の乗りきつたと見做すべきも、作曲の方はさまでに、進歩したものと思へず、三絃は竹澤權右衛門で案するに義太夫と、權右衛門兩人で節付したものと見るべきである。

義太夫の藝の進境するに反して、興行の方はいつも缺損つゞきで、經營一切を切盛する仕打方を兼ねて居る義太夫も、流石に進退窮まり、策に盡き果て、思案に沈淪したときに、大近松が書卸して提供したのが、大阪眞世話物の「會根崎心中」であつた、在來に時代物専門で來た義太夫が、初めて語る眞世話の味、頗る冒險であり、見當がつかず、知りもせぬ難解の文字を、無理に讀まされるやうな苦惱、決心して研究に努力した義太夫の熱意と、眞世話の新作に、始めて筆を染めて一氣呵成に書き上げた近松の眞劍味、之を上演した義太夫が、放膽極まる態度に呑まれた觀衆、湧きあがるやうに嬉こんだのも無理はない、今までの時代物に、厭き／＼した折



に、全く毛色の變つた現代語で、簡単に、分り易く、自分等の毎日繰り返しつゝある生活様式と、些も變らぬ町家の娘お初や、町人の徳兵衛が、生玉社前や、會根崎の森の情景などを、舞臺で淨瑠璃化して、まさしくと眼前に視せつけられた觀衆は、びつくりして逆せ上り、夢中になつて感激するのが當然で、満都の人氣を煽り立て、日延べの續演で、大入満員を取つたことに、何の不思議もないのである。

近松の作で、初代義太夫が語つた當時の節付は、未完成のものであつたと信すべき理由がある、三味線にしても、やつと太夫の伴奏程度のもので、義太夫節の音楽化といふ域にまでは届いて居なかつたばかりでなく、觀衆の眼も、耳も頗る幼稚であつたと云ひ得るのである。義太夫は自分の考案研究した、新淨瑠璃、義太夫節に手を染めて刻苦辛慘、藝道の第一歩を拓き得たが、要するに之は、義太夫自身にとつても、試練研究時代であつた譯で、基礎を作り、大略の意義を建て、開拓鴻業の中途、正徳四年八月、六十四歳で、開演中に永眠したのである。西の芝居を建てた、貞享二年から算して三十年の舞臺生活この間に、新淨瑠璃の義太夫節九十餘編を語り遣して居る。

### 初代政太夫と、義太夫節の進歩

一世義太夫の遺言で、その後繼者となり、竹本座の太夫總帥格に選ばれたのは、まだうら若い二十幾歳の、初代和歌竹

政太夫であつた。

義太夫の流れを汲む門人七十餘名、互に内心では藝に鎬を削る、古參、古老の多々濟々たる中で、若輩者の政太夫（後に竹本と改む）を抜擢した義太夫は、流石に活眼の師であつた、果してこの天才兒の至妙の藝格は、初代未開の境地を拓いて、義太夫節をして永世の基礎を築き、確固不拔な語物として育て上げ、斯界に偉大なる功蹟を遺して、現今までも話物語りの名人と仰慕されるに至つた。しかし、この大成した裏面には、興行師とし、作者としての出雲が控えて居て、いつも指導し、後援して居つたことも見逃してはならぬ。

政太夫が、二世義太夫を襲名したのは、享保十九年二月で「應仁天皇八白幡」を語り、播磨少椽藤原喜教と官名を拜領したのも、同年であり、後見役の近松巢林翁が没したのも同年である。政太夫の門人連名帳に記載してある、玄入門弟、大和屋久兵衛事、竹本土佐太夫外八十餘名、素入門弟、伏見屋宗助外九十餘名に上り、この内から初代竹本染太夫、同竹本紋太夫、同竹本島太夫、同竹本錦太夫、同竹本住太夫、二世竹本政太夫などの鬼才と俊髦を輩出させたことは、年來培養し、育成した藝道の至誠に胚胎した結果である。

作曲もこの二世義太夫時代から、次第に進歩したものと見るべきで、古人の口傳、祕書に遺されてある、淨瑠璃七十七節と稱する頃は、想ふにこの政太夫前期では、あるまいかと感ぜられる、探究者の高教を仰ぎたいものと思ふて居る。

大近松が初代に書卸した、寶永、正徳の頃と、政太夫に書卸した享保頃の院本、黒字節付を見るに、まだ粗笨の域を脱して居らず、當時の作曲の程度も臚ろげに想像せらるゝが、想ふに初代は作曲には左程に重きを置かなかつたと云ふべきで、二世義太夫に至つて始めて、進歩の道程に入りしにあらざるやと感ずるのである。作曲はその後になつて發達したものと認むべきで、太夫と三絃が陸續と顯はれて、節數も漸次に増加し、改良せられて來て、藝の妙諦と、蘊奥が自然に開拓せられて、名人上手の風韻や餘情が、或は型ともなり又は風格ともなつて後世に傳へられたものであり、三絃音譜の朱付の始祖と云はれて居る、初代鶴澤清七(文政九年歿)の遺した朱章にある百九十餘節は、遙かに後世のもの故に、此時代のものとは對比して論ずることは出來ぬ。

近松翁作の義太夫節の中に、翁の歿後になつて作られた節付が、澤山に存在して語られて居ることは、翁の原作時代の節付が、後世になつてから中途で改變せられたものと見るべきで、素より、不出世の作家として翁の遺作は、偉大なる存在ではあるが、その當時に於ける作曲が、人形劇の音楽として、必ずしも、莊重のものであり、最高の音譜の如く思ふことは偏見で、翁の修辭は、その時代の觀衆には聊か難解のところもあり、その作に對する節付も粗雑であり、之を演じた太夫も藝力が伴はず、あの透徹した情味を語り活かすことが至難であり、その作の表現上の條件が、餘りにも均衡がとれ

ず、翁の歿後にかゝる名作をして、あたふと死蔵することを惜んで、つとめて平易に改竄して、一般觀衆に理解納得できるやう、節付の殆どは改變せられ、文章も改削して、淨瑠璃化して上演したことから思ふても、翁時代の作曲を無闇矢鱈に有難がり、優れた音譜と思ふことは、翁の作と、節付とを混同した錯覺ではあるまいか、我等は、翁の作つた淨瑠璃を古典の鑑として、下手に語らずに、眞面目に研究すべきものと思ふのである。「名作に名曲なし」と誰か云ふたことは、あながちに一面の眞理がないとも云へまいと思ふて居る。

翁のゆたかな詩情、天才的の作品を讀んで翫賞する氣持ちと、語る義太夫節を聴くのと、木偶の人形が表現する動きを觀るのは、そこに、非常な隔たりがあり、全く違ふ意味が心に浮かんで來るやうに、之を嚙嚼できなかつた昔の藝人や素養の乏しかつた當時の觀衆の大部分の人が、たゞ操芝居を見物して娛んで居つた程度では、翁の作品の眞の味が分らぬことが當然で、何事によらず、觀衆本位、流行本位で押し通して居た、あの時代の世想としては、觀客を嬉ばすための節付の改變も、名文の改惡も興行上からは、餘義ないことであつたと思はれる。

### 東風と西風の起原と、その終末

西の芝居に出勤して居た、稀世の美音家で人氣のあつた、竹本采女太夫が退座して一統を驅り集め、今の辨天座の邊に竹本の流義をゆたかに語るといふ意で「豊竹座」の櫓を建て、采女改め豊竹若太夫と名乗つて、西の座に對抗したのは、元祿十五年五月で、これが東の芝居の起りであり、始祖である。若太夫は、その後享保三年一月、上野少椽藤原重勝といふ官名を拜受し、同年十六年九月に、重ねて越前少椽を拜受した。

若太夫は天稟の美音で、鈴を振るやうな聲、巾のゆつたりした音で、いつも觀衆を牽きつけて陶醉さすのが特長であった。

西の芝居(浪花座のあつた邊)の義太夫は豪音で、藝と格とが一致した堂々とした自力のある語り風で、同じ道頓堀に櫓を並べて對峙し、勢力伯仲互に藝道に切磋琢磨して、兩座ともに、作者、太夫、人形遣ひを網羅し、あらゆる手段を講じて競争したばかりでなく、兩座に最良の客筋が、對立して見物人の講中までも造つて、双方を應援するために、一層人氣を沸騰さし喧擾を極めた。

東の豊竹派の太夫と、西の竹本派の太夫は互に始祖の藝風を慕ふて、傳統を固守し、東風は、豊艶で華麗な節廻しに凝り、西風は、豪音で氣魄のある濼い藝道に精進し、兩座の藝風が、その特長によつて瞭かに區別せられて居り、相互に優越感を持して、平素の交際さへも、藝の估券に拘はるやうに考へられて居たもので、計らず、寛延元年八月「假名手本忠臣藏九段目」の語り口について端を發して、人形遣の吉田文三郎と(後の作者吉田冠子)、太夫座頭、竹本此太夫が爭抗を引起し、座主出雲の苦心によつて、遂に東西の太夫交換と云ふことで話が纏り、僅に一夜の中に、さしもの紛擾も圓滿に落着いて、西座から、此太夫、島太夫、百合太夫、友太夫が東座に轉勤し、東座から、豊竹大和椽(後に竹本大隅椽)、千賀太夫、長門太夫、紋太夫が西の座へ入れ替つた。

之が動機となつて、その後は太夫、三絃が東西ともに轉座する習慣が出来た、ために、東西の藝の風格も、いつとはなしに壞れ、崩れて、現に文樂座なども「特種の型物を除けば」藝は殆ど東西混合式とも云ふべき語り方に變化して來た、從つて古名人の風格やら、古典の匂ひが、漸次に稀薄になつた。

と云ふのが事實である。

淨瑠璃節の廣い意味から考へて、その長を把り、短を捨てると云ふことは、強ちに悪いとも謂へぬ處もあるが、要するに之は太夫の實力の如何によるもので、人間は生れながらに各自の簡性があり特長がある、聲の善惡によつて、藝の品位と天分が備はつて居る、西風の藝に適當した太夫が、東風の眞似をしたり、東風に適した天分を持ちながら、西風の藝に擬つたりすることは、自身の簡性と特長を捨てる譯で、藝の履き違ひで、昔から斯界で名人上手と慕はれる人々は、悉く自分の天分を充分に活用し得た人であることを知らねばならぬ。

東西の風格を、簡單平易に云へば、東は、流暢華麗でわだかまりのない始祖以來の音遣ひの妙諦を重要して來たと觀るべきであり、西は、剛健雄大で、氣魄の満ちた汎くして深い藝道の祕奥を固守して來たと觀るべきである。

豊竹派に屬した、越前風、筑前風の語物と役場、駒太夫風鍋屋風(麓太夫)などの、東門を代表した語り風と、竹本派に屬した、鹽町風(初代政太夫)、染太夫、長門太夫、春太夫などの語り風の餘韻條々として、西門としての模範的の藝格を研究すれば、東西風格の相違は、誰人にもはつきりと探知し得らるゝ筈である。

さしも賑盛を極めた東の芝居も、明和元年九月十三日、豊竹越前少椽の死去から經營難に陥つて、「内助手柄淵」の興行を名残りに、明和二年八月に六十餘年の歴史を遺して閉鎖の運命を辿り、西の芝居も座主出雲が創意を凝らした、人形寫實本願とも云ふべき奇抜な陣立も影冷めて、その歿後十二年目の明和四年十二月に、八十餘年の全盛も遂に終末を告げてあはれにも没落離散するに至つた。



# 明治時代近松研究の先驅者

(二)

中野三允

然るにおさん何故に茂兵衛との間にかゝる不都合のことを生ぜしか、畢竟此間違は外界より偶然に來りしか内界乃ちおさんの性行より來りしか、若し幾分か其性行に關せりとせば其性行にいかなる缺點あるか、之を觀察せんには、先づ其境遇より敍せざるべからず、おさんの境遇を按ずるにおさんの身にとりて心配となるべきもの二つあり、第一は親里の零落第二は夫以春の仇心これなり、然れども第二のことは茂兵衛と間違を起す其夜までは一向さとらざるものゝ如し。おさん嘗て飼猫にじやらけながら述懐していふ、「先度も下立賣のかゝ様と親子たつたふたり居るゑんさきの藏の屋根で此三毛を可愛げにそれは見られたことかいのあんまり憎くさに棹竹持て追たれば云々、こりや男持ならたつたひとり持物じや、間男すれば礎にかゝる女子のたしなみしらぬかと、礎にかゝらざれば間男するもよしと云ふ意味にはあらざるべけれど、全體の言葉何となく情操の高からざるをあらはす、且つ親里の零落はおさん嫁する前より已に知る所なれば、寝ても寢て

も心配に堪へずと云ふ程のこともあらざるべけれど、母が來りて無心云ふまでも少しは心配の様子あるべき筈なるに、他愛もなく猫に戯れて一向愁といふことを知らざるが如し、おさんは全く苦勞性の女にはあらじ、又下女のお玉と話す詞にいふ「なんと今のを聴きやつたか同じ物の云ひ様でも茂兵衛の様に物やはらかにいふても事は濟む、あの人も氣に如才はなさそふながぢたい顔がにくていにけんどんに、見へるゆへ詞もあいそがなさうな、何と助右衛門男にほしいか肝いつてやらふかお玉「エ、おさん様いやらしい事おしやんすな(中略)同じ手代衆の内でも茂兵衛どのゝ様なかりそめに物云ふもあいそらしうて、いついつ腹立顔も見せずほんにあの様な男持女は果報でござんす」妄りに下女と立ち交り、禮もなかくかゝる話をなす所を見れば愼み深き性にあらざるや知るべし、不謹慎か恍惚か一寸疑問也又お玉か手代助右衛門を責めし詞にいふ「助右衛門物には了簡品も有村さん様茂兵衛殿一所にのいての上なれば間男でないといふいゝわけ無けれ共云々おさん様

にほれた間男と云ふはそなたじや腰元のかやをだまして何にかや取らせてたのんだも知つてゐる、もういをふくと思ふたれどイヤく人をそねる事とかくおさん様に疵さへつけねばよいと思ふて此玉か急度めになつておさん様の傍を一寸もはなれぬ様にしたによつてかやめもいひ出す折りがなかつたやらわしをけぶたそうにしてそなたの文を焼て捨おつたも見てゐる」と助右衛門の佞人たることは申すまでもなし、されど此男おさんの性行うきくとして重からざる所に付込みしにはあらざるか。

さて又おさんが末代汚名を流すに至りし根本は、良人に内々にて茂兵衛に銀才覺を頼みしこと、夫以春がお玉に意ありとき、お玉と寢所を更へて良人に耻か、せんと二條これなり。前者は「以春様にいふたらばついでに堀は明けれど、とつ様もかゝ様も聲に無心云かけては、大事の息女にひけ付とお年寄の我がつよく、以春様へは鼻息もしらす事が叶はぬ、助右衛門にいふたらば又例のしがみ顔、眉間に皺よせて其足で以春様にいふは定、我おつとを差置て手代にいふは何事ぞと結局物に尾緒が付云々親子の間夫婦の間に餘儀なき事情あれば此失行は全くおさんより出ざるが如くなれど、おさん婚禮して未だ多く歳月を経ざるに、殊に十七八の婦人にしては夫へのかくし立て(たとへ親の爲とはいへ)などは少しくだいなそれたる所爲にあらざるか、これ全くおとさきを考ふ智力乏しきによるなるべし。後者は夫以春を思ふ餘りに怨むといふ

親切なる心より爲したるものなるべけれど、かゝる企を下女の部屋に行ひしは暗に其性の輕率なるを示す、當時俗に云ふ女らしと云ふ有様なきものと云ふべし、其原因は左の問答に明かなり。お玉「ハアこれはおさん様、御用が有ならおねまからお手をならしはなされず云々、おさん「ムウそなたもまだねやらぬの、別に用はなければ共茂兵衛の難にあやつたは、皆此さんがたのんだ事、それをどうして知てやら岡崎の伯父にかこ付、我身に取なしいひ分してたもつた心ざしあんまりく嬉しうて禮いひに來たわいの、(中略)扱もく今の世の賢女とはそなたのこと、男畜生とはつれあい以春殿、女房獨りまぶつて居る男とはなけれ共、あんまり女房をあほにした踏付たしかた、涙がこぼれて、腹が立(中略)「エイなんのいの、昔井筒の女とやらは、ねたみのほむらに鹽の水が湯となつた、男の恨に身がもへて、さむさつめたさいとはぬひらに頼む。或はいふおさんは論するまでもなく貞女なり貞女の解如もさまんく茂兵衛との不義は事の間違にして何道徳の解あれば偶然に起りしものなりと、おさんいふ「なふ茂兵衛殿、とてもわしらは今日あつてあすない身、命を命と思はね共、いとしや玉はどう成りやつたと案じるは是ばかり、只ゆかしいはとつ様かゝ様なんぼ思ひあきらめても逢ひたふごさる」と、おさん眞に貞女ならばタトへ以春悪性にもせよ、一回位は何んとか云ふべき筈なるに、一向其様子なきは如何。然りく皮想の見なり或は貞女といふ。或は云ふ貞女ならばこそ茂兵衛と走りは只潔白といふ意か

し後も夫婦とならずと、此論一理あるが如くなれど、兩人の境遇を考へざる論もおさんと茂兵衛は科ある身なれば公然夫婦となる能はざるべし、夫婦と名乗る能はざれども、所謂夫婦ならざる夫婦を氣取りしやも計られず、よし然らずとも、おさん眞に貞節あらば間違を生ぜしとき死しても其場にて潔白を良人に示せしならん、遁がるゝだけはのがれみんと（親の爲とはいへ）企つるが如きものを貞女なりとは受取られぬ論と云ふべし。思ふにおさん良人を思ふ情は下女お玉を思ふの情に劣り、下女お玉を思ふ情は茂兵衛を思ふ情に劣り、茂兵衛を思ふ情と親を思ふ情に殆ど同じきが如し、爰に證據所な おさんかくれ家に在りしとき、祝ひましよの万歳にき思議だてせられ、「もし人が問ふたりとも島原で見た女郎じやといふてたも」といひながら錢さし抜ひて遣り「おりしも酒をきらしたれば、是で飲んで下されといひし所知恵あり落付あり、又召捕はるゝとき能く覺悟して其顔色を變せざるは度胸ありと云ふべし。是れ境遇の異なるより前半と後半と其性行を少し變じたるなるべし。

以上述べし所によれば、おさんが汚名を蒙るに至りしは外界より來りし事情あれど、多くは其性行に缺けたる點あるに依る。かくありてこそ近松を *Paranoid* といふべけれど、第一は情操の高尙ならざること、第二は智力未だ大家の婦となりて斡旋するに堪へざること、第三は性質アダツボイと云ふにはあらざれど、何んとなくふはくとして落付きのなきことこれなり、此性行を以

てかゝる家にあるは、いはゞ烟草を喫いながら烟硝庫に立つて異ならず、其大事の速に起らざりしが不審なり。

茂兵衛は少しく内氣の様なれど、意氣地なしと云ふべからず。又耻に遇ふて耻を知らざるものにあらず、又平素極めてかたくるしき人なれど、色なく艶なく情なきものにあらず。人柄もよし、男氣もあり、大家の番頭としては好き方なるべし。おさんが「是茂兵衛」とよぶことをきゝて忽ちおなをり、「たつた今歸り少し酒氣もござれ共、もし急な御用もや」と云ふたぐい度々あり、其かたくるしきこと推して知る。主人以春の巾着明て印判を取出さんとせしとき、助右衛門に「茂兵衛其れ何する」と聲かけられてびつくりせしが「ハア助右衛門か天道は恐ろしい見付られてのけた、壹貫目程入用有て旦那の名代で銀をかる、此月中にあてが有、二十日程の間目ねぶつてたもるか、そなたの氣では朋輩の首切らるゝもいとふまい、茂兵衛が科は極つた、くゝる成と殺す成と勝手にしや」となげ出だし、痛くたゝかれて髪も、ときむしらるゝに至れど、「主の印判をぬすむとは云々しりながら今日迄茶屋の見世へ腰かけず、かるた打様存せず、人なみに着かへは持、手足まといの妻子はなし。何を不足に私欲をせう、からだは粉にはたかれても、茂兵衛が口から云ひわけせぬ、おさん様お袋様詫言云ひ杯遊ばしたら未來までのお恨」と又召捕はるゝとき、かくれ家の家主助作に、八百目の金を預けしを、なきあとにて黒谷の寺へ上げてもらひたしと云ひしを、



助作預りし覺えないと争いしかば「是式のめくされ銀、おのれ風情に彼はいはふか、よい／＼おのれにくれた、八百目の銀うぬが根性相應に、げんせは長者と悦んでゑんまの前で算用せい」とつら骨三ツ四ツふみつけて、さらぬ顔にて居たる所等を見れば男氣なきものにあらす、意氣地なきものと云ふを得ず。又亡命中道におさんの親にあり、「我男のつらをさげ、か様のわざを仕出し、のめ／＼ながらへ有るもおさん様の御命を何とぞと存るゆへ、お宿もとへおさん様を御同道なされ、御命だけ助け下されば、科は私獨りに受物の見事に死まうしたい」と頼む所流石に耻を知らざるもの、言にあらす。然りと雄も茂兵衛おさんより銀才覺の頼みを受け、深く義と思ひしことは、何んぞ知らん主人以春に對して大なる不義なるを。茂兵衛は只事を圓滑にすましたいが本志にして、少しも以春の家を覆し、主を賣ふ杯いふ悪心はなけれど、他の危からざる手立によりて爲さんことを一回だも考へざる所甚だ智なきに似たり。又己が過失を怨みつ悔みつ悲みつする所、良心なきものの所爲にあらざれど、速に耻を雪ぐことを考へざるは智乏しきものと云ふべし。要するに茂兵衛の情操は、極めて高尚なる潔白なるものなれど、知力は極めて乏し、又勇氣は十分あれど、とかく人情に溺るゝ傾きあり。極めてかたくなるしき性質なれど、早合點をする風なきにあらす。此等は茂兵衛が汚名を蒙るに至りし大原因となりたるなるべし。全篇を通讀して後ち、虚心に冥想すれば腦中左の如き觀念浮ぶ。

此時、世は已に心中を以て名譽とする傾きありしがおさんかねてやさしと思ふ茂兵衛と云ふ男を得しゆゑ、死んでの跡に野心ありしにはあらざるか、然らば氣の毒なるは正直なる茂兵衛なりけり。(滑稽!)

仁王生の評は右にて終りぬ、原本には之に對するあまたの評あれどもみな省きつひとり春のや主人の挿評のみ本行中に割て殘しおきぬ。なほ主人が全編の終りに加へられたる評は次の如し。

仁王生人物評の先鞭を日本院本に着けたり、稱するに餘あり、只解剖の方法淺草蠟細工の獨逸女が細工物の臟腑を取りだして示すに似て輕々しく大方は皮想なり。

また評者中に道義を絶對にとりて二人を論ずるは酷なりとおさんと茂兵衛との肩をもつ説あるに對しては主人は

おさん茂兵衛等を評するに標準を絶對的道義に取る素よりよし、只其失敗の跡を解説して躍然たらざるを憾む。凡そ批評家の本分は我見て感得せる事を他人の胸へも活けるが如く見えしむるにあり、只淡泊にならべては不可也

かくて翌月(十一月)の『延葛集』第二號に仁王生は「夢のゆめ」第二を出し、心中天網島の治兵衛と小春」を論ず。今これを掲げざれど、要するに此の評は「戀八卦」のに比して甚だ出来なかりしかば、

治兵衛小春の人物評は「一月の附録」として僕ものせんと思へばこゝには細評をくはへず諒したまへ。

かくありて春のや主人が「心中天網島」の評はいでぬ、蓋し研究者に批評の標準を示さんとてなり。今年初刊の「早稲田文學」を見し、思ひきや主人が此の時の評、五年前の言葉と其の儘一月の附録もゆかしや、不倒生當時を懐く、これが先驅たりし仁王生の爲に數言を費すことしかり。(完) 三九日「春のや主人」が坪内逍遙なるは人皆の知るところ。

(昭和十五、四、二十)

鎌倉三代記

三浦別れの段

川口子太郎

あまりいゝ作ではない。一と頃のニュース映畫のやうに至る所大砲が轟き、鐵砲が鳴り、砲煙天に立騰り、旗差物反翻として翻るといつた工合で、立川文庫の大坂夏の陣を義太夫にしたやうなものである。最初木村長門守重成に擬へた三浦之助義村の血判取のやうな場から始まり、後藤又兵衛に擬へた和田兵衛が坂本城(大阪城)の評議のくだらなさにクサつて元の駕舁にならうとするのを宇治の方(淀君)が頼家(秀頼)の幼兒を養子に與へて再度の出陣を促すのが三ツ目、次に辛崎の段で此幼子を誤まつて湖水へ流し、五ツ目が大筒の段と稱する海賊摺針太郎の住家——琵琶湖で海賊をやつてゐるのだから妙であるが——で、お約束の身替り、六ツ目になつて問題の佐々木高綱(真田幸村)が百姓藤三と化けて田植をしてゐる件から七ツ目の三浦別れの伏線が始まり、やつと面白くなる。

云ふ迄もなく「近江源氏先陣館」の續篇たる形式だが、盛綱陣屋の道具である佐々木の偽首の主、百姓藤三といふ人間を假りて佐々木高綱を出没させ、偽首の女房おくるといふ女を實在させて、この計略に協力させてゐる仕組だけはいゝ思ひ付きだと云つていゝ。従つて高綱と間違へぬ爲にと、時政の前で藤三が入墨をされる所謂入黒子の段はこのおくるが活躍して一寸面白い端場に出來てゐるし、時姫を奪ひかへして來たらば女房にやるといふのも、大阪落城の際に千姫を救ひ出す坂崎出羽守の挿話を暗示してあるし、三浦の母の茅屋へ時姫が豆腐を買つて盆にのせ、片手に貧乏徳利をさげて戻つてくる趣向も面白い思ひ付きで、全體に、この六七の二段が優れて描けて居るが、其後は時姫は自害し、高綱は高樓にゐる時政を射撃し損ねて、頼家が船で蝦夷ヶ島へ逃れた事をきゝ、諦めて坊主になるといふ結末でつまらない。この結末は大坂落城後秀頼が薩摩か肥後へ落ちたといふ虚説が昔から有

つた故、こんな工合に書いたのだらうが、勿論秀頼は實際元和元年五月八日の朝大阪城内の山里糎庫で淀君と共に自刃したのであつて、薩摩落は豊臣家の運命に同情した當時の人の空想から出た事である。此作者もシンパの一人かも知れない。

凡て、續篇といふものには碌なものが無いのが常で、芝居でも小説でも當つたものには續、續々が出る事があるが、大ていくだらない。此作もそれだし、第一「鎌倉三代記」といふ題と内容がまるでマツチしてない。前に比企能員の隠謀をテーマとした紀海音作「鎌倉三代記」といふ淨瑠璃があるから、紛らはしくて困る。「續近江源氏」とでも名付けた方が適してゐるのだが、「近江源氏」を書いた近松半二への遠慮から、さうしたのかもしれない。作者不詳であつて、三浦別れだけは半二の筆だといふ説もあるが、私は上述の理由と書卸しが江戸肥前座である事から推察して、半二とは違ふ人が書いたもののやうに思ふ。勿論半二の死は天明三年だから、此作の出た安永十年には生きて居たけれ共、文章技巧の工合どうも半二とは違ふ。讀本をそのまま淨瑠璃にしたやうな作で「伊賀越」が絶筆と稱される半二の書いたものとしては、あまり出来がわるすぎる。

三浦別れは全篇の白眉である。こゝには夏の香がする。竹藪にかこまれた茅屋に三浦の老母が蚊帳を釣つて病臥してゐる。時姫が赤い大振袖の姿で手拭を姉さんかぶりにして遊園

扇で藥湯を煎じてゐる。夕昏時で、蚊のラツシユアワーである。宵闇の迫つた家の中に蚊やりの煙が低迷して、れんち窓から夕空へ仄白い煙が靜かに流れ出してゐるやうな感じ——それで僕は此一段を愛する。が作は依然として悪い。まぐら一枚讀んで見やう——「されば風雅の歌人は戀とや聞かん虫の音も、澤の蛙の聲々も、修羅の街の戦ひと——一體何のことか。此文章はどれがどこに掛けてあるのか、さつぱりわからん。岡田蝶花形氏だつてわかるまい。随分變な事を書いたものである。それだつて誰も不思議とは思はないで立派に通用してゐる。表現第一、内容第二が淨瑠璃である。テンネだつて同じ事だ。

○

三浦之助が歸つてくる。「若宮口の戰場より一文字にとつてかへす」——若宮口といふ字がよい、響きもよい。これは木村重成の戦死した河内平野の若江を綴つたのであらう。元和元年五月六日の拂曉、霧の罩めた生駒山を南下して道明寺方面にあがつた徳川軍の鯨聲に、重成の隊が馳向つたのが、今大軌電車の若江岩田から一軒ばかり南へ行つた地點で、相討で死んだ大阪方の重成と、徳川方の山口伊豆守の墓がある。まことに「夏草やつはものどもが夢のあと」である。——その若江を綴つた「若宮口」は、如何にも漂々しい若武者の美しさを連想させる文字だ。こうなると人間も住む場所、死ぬ所、なるべくよい名前の地にかぎる。僕のゐる京橋區横町三

丁目なんぞ、いかん。——震災前迄は北紺屋町通稱大根河岸で一寸粹だつたし、其昔弘化三年江戸大火の時、南町奉行所（今の有樂座あたりにあつたらしい）の遠山の金さん事左衛門尉が出張して單身猛火を喰ひ止めた由緒ある地點なのに、今川口子太郎が義太太を喰りつゝあるに及んで俄然榎町三丁目ナンテ色氣のない町名に下落してしまつたのである。

時姫の「短い夏の一夜さに」といふクドキも、明けやすい夏の夜の蒸し暑いやうな遣る瀧なさが滲んでゐる。僕が中學の二年生の七月松竹座でこれを始めて見た時、死んだ福助の時姫が實に綺麗だつたけれど、汗で白粉が浮いて、白い雫がボタボタたれて、見てゐてもトテモ暑かつた。又其後僕が此義太夫を稽古したのも慶應を卒業する前年の夏で、葉山の海岸の學校の合宿へ和孝師匠が三味線を擔いで尋ねて来て、モダン揃ひのK Oボーイのかたまりの中で「思ひやつてくれもせで」なんかやり出したから皆呆れてゐたし、戸外からは覗きに来るさわぎだつた。そんなわけで僕には「三代記」といふとすぐ暑さを連想する経験がある。今年も七月の淨雲會の大會で上杉文盛君が前、僕が奥で分擔してこれを一段出す事にしたから、又暑い思ひ出が増えるわけである。芝居だつて「三人吉三」を節分の晩に見ると氣分が出るし、夏は團七の泥仕合など嬉しいから、義太夫を語るだけでも、やはり其季節のものが氣分が出るやうである。西日が反映してゐる高座

で「たゞさへくもる雪空に」など、かなり迷惑だからだ。

餘談になつた。少し駈け出さう。三浦之助が時姫に父時政を討てといふ難題を吹かける。こゝへ來ると孝心の三浦も相當なエゴイストで一寸嫌いになる。が彼は飽迄忠孝の純情青年であり、高綱に強制された計略の實行としてやむなく時姫につめよるので、心の切なさは容易ならざるものであつたに違ひない。だから立板に水の如く滔々とまくし立てるのは變だが、そうかと云つて一々言ひにくさうに思ひ入れ澤山では聞いてる方でヂリ／＼して來る。こゝの演出は一寸困る。星野桔梗氏にさう言つたら、言ひにくい事だからト息に云つてしまふといふ事もあり得ると答へた。やゝ變氣論だが一ト理窟でもある。然し、「親につくか夫につくか」といふ難題は、ひとり時姫だけの惱みではなく、世間の新嫁にはよくあるやつである。「三代記」のやうにスケールは大きくはなく、切るの殺すのさわぎではなくても、大なり小なり、今の女にでも此種の煩悶はあるやうである。「どちらが重い軽い共、恩と戀との義理づめに」はそんな意味で現實的な涙があると云へる。たゞ「北條時政討つて見せう、父さん許して下さりませ」と時姫の如く勇敢に戀愛に突進するが、一向ふんぎりがつかないかが違ふだけだ。藝妓などは大體において親についてしまふ。社會の見えざる制度環境のせいである。僕なんかもひどい目にあつた経験がある——全く他人事ぢやない。

叔愈々々々木高綱が井戸からぬつと出現する。井戸だの簾だのから出てくる人物は大てい人間離れのした怪人である。彼もやゝ幽霊じみて、「する事なす事一つもならず」といふ悪霊の感じでなければならぬ。芝居だと「地獄の上の一足飛び」で、青地に六紋錢の縫をした着付にぶつかへして、兩手を擴げて指先をダラリと下げ、舌を出した地獄見得といふのをやる。この型は中車がグロテスクでよかつた。吉右衛門は自分の人柄を考へてか賢明にもこれを避けてやらない。一體に吉右衛門の時代物は小さくて現實的で僕は嫌いだ。菊五郎もその意味で好きでない。歌舞伎芝居は最近官能的にすつかり駄目になつてしまつた。菊吉の歌舞伎劇など實に白々しくて厭である。文樂の人形では赤の着付に襷をかけた鳥居前の忠信のやうなこしらへだが、どうも佐々木らしくない。高綱のやうな役は超人間的な、寫樂の繪のやうな奇怪な面白味がなくは駄目である。芝居でも義太夫でも、漸次こうした味が乏しくなつて、油のヌケたやうなものになりつゝあるのは情ない事である。

尤も此作を読むと高綱もあんまり大した人物ではなささうだ。物見の松のところでも「はや四更も過たれば東の陽氣はこれ鷓鴣」などと偉さうに神祕がつてゐるけれ共、「東が白んで鶉が鳴く」位の事は狸だつて知つてゐる。それに何人も偽首を使ふところを見ても、この人はよくある顔をしてゐたに違ひない。世間一般にザラにあつて、特徴のない極く平凡な顔でない、百姓藤三以下數人の影武者の活躍する餘地がないわけだ。然し、そんな理窟は超越してグロテスクな官能美の表現がほしい。

終りに藤三女房のおくるといふ女性が僕は好きだ。仕所のない、つまらぬ役所になつてゐるけれ共、高綱と知り乍ら夫藤三へ仕へる如く、時政の前で夫婦喧嘩までして見せてこの計略につくしてゐる。時姫が承知して計略が成就するとなつてホツと我にかへつて、そゞろに死んだ夫を追想して、「私の夫は水呑百姓、かつかつの業藝さへ、長の病氣の貧苦のうち、不相應な御恩のお貢、金銀に命は賣らねど、夫も元は侍の端くれ、生れついでに臆病で、弓引く事も叶はぬ非力、わが身を悔む此年來、誰あらう佐々木様に面ざし似たが幸せで討死の數に入るは一生の本望と、にこ／＼笑ふて行れた顔、今見るやうに思はれて、あなたのお顔を見るに付け、思ひ出されてなつかしうござります」と一寸センチになつたりして、死んだ夫を愛しつゞけてゐる工合、よく描けてゐる。淨瑠璃の中の人物で、あまり作者が技巧を加へてゐない爲に、却て素直に、よく書いてゐるのが屢々ある。おくるなども其一人である。僕は「三代記」を語る時、こゝが一番すきである、こゝでは一寸悲しくさへなる。

兎に角全體としては愚作だが、盛綱陣屋へ出てくる首一つから藤三とおくるを創造した事だけは此作者の手柄である。尙序に申添へる事は、三浦別れの段は普通八ツ目と云はれ、五行本にもさう書いてあるが、これは七ツ目がほんとうである。更に五行本の間違ひは三浦の詞で「スリヤ眞實親達も夫には見かへぬな」とあるが、丸本には「親達も」とある。此場合敵將北條時政を指すのだから「親達」といふ複數は間違ひだし、「親とても」の方が意味も強くなるから、枝葉ではあるけれど訂正しておきたい。

◇素義界を去る◇

◇◇近江清華氏◇◇

栗原千鶴

かつた、しかし氏の性格は私は最もよく知つてゐます。

私は嘗て杉山巴仙氏と別れて以來誠に淋しかつた中に、氏と別懇になつてからは非常にうれしく、永い間の交誼中精神的に御高配を蒙つた事も多かつた。

今又こゝに氏が素義界を去らるゝ事は私にとつては再び此上もない淋しみを感ずる次第で、今更何んとも申上げないが氏を素義界から遠ざける事は返すゝも残念であります。

鈴木松實

私は命の恩人として平素近江氏に感謝をしてゐます。それは、忘れもしない十

三年六月八日の事で、清水ビルで私に禁煙をすゝめられ、私はその場限りふつつりと煙草をやめてしまつた、此の禁煙が原因であの薬から生れたやうな私が、今では薬も用ゐず體量も増して頗る壯健となつたのであります。近江氏も私は今から煙草をやめると言つて、煙草入を窓から川へ投込んでそれ切り禁煙された方でありました。

氣短かな氏は私の氣長がを心にかけず、二人はよくびつたりと氣があつて、氏の言は私はきつと用ゐたので、氏も又私の言ふ事をよく聽いて下さつた。

氏が素義界を去られるに就ては、今度氏自身御氣分に添ふた邸宅を建築して轉居される程だから、皇紀二千六百年に當り何をか世の中を御感じになつての事であらうと思ひますので、氏の此の心境を私共はそつとして置くのがほんとうでありませう。凡ては氏にお任せしてお止めする事を遠慮すると共に、改めていづれは又素義界に再出演していただきたいと希望してゐる次第であります。

○  
近江氏はお若い頃非常な虚弱なお身體であつたので、健康増進の爲めに義太夫を教つて、聽いて貰ふといふよりも折にふれてはお座敷で聲を出して見たいとの意向から義太夫の稽古にかゝられたのがそもゝの始まりで、それがだんゝと進んで知らずゝのうちに遂に今のやうに東都の素義界へ乗り出すやうになつたのであるが、永年修得された氏は義太夫に就ては相當に理解もあり、交際をすればする程温厚篤實、明瞭な方であつたが、凡てが短當直入的であつたが爲めに、兎角誤解されて敵を求める事もないではな



# 塵外居放談

煙亭記

## ●芝居ごっこ

### —記念會は天下泰平—

近頃呼び名を改めて、歌舞伎義太夫節とかいふ昔のチョボ語豊竹巖太夫君は、その宣傳用として、古くから淨瑠璃時報といふ小雜誌を出してゐて、それが何と、二百何十號かに及んだ所から、これを紀元二千六百年に結び付けて、六月の中旬、日本橋俱樂部に盛大な祝賀會を催はし東京素義の大連を動員して、その蒞著を傾けさせ、更らに餘技として二幕の素劇を演ぜしめスベラシイ喝采を博したといふ事である。

無論、御招待も受けず、當日のプロさへ知らなかつた我れ等は、これを拜聴し、拜見するの

光榮には浴さなかつたが、恐らく、此の素劇二幕の餘技が、當日大多數の見物と呼んで、盛況を見たのであらうと想察すればどうか午前中から汗を流して出演された多數の素義の紳士方には相濟まぬ氣もするが、事實その通りでは無かつたらうか。而して、その素劇なるものが、大して巧く無かつた事も想像され見物の大多數は、實は苦が笑ひを禁じ得なかつたらう事も想はれるのである。何れもは泰平の逸民であるのである。今の世界的情勢は、今の日本の現状は、など、野暮な事を言ふべからずである。然し、この素劇に至つ

ては、何といつても、藝術でも趣味でもなく、唯だの、全くのお道樂である事は、争はれぬ、グツとでも言つて見ろである。道樂といへば、素劇くらゐ念の入つた、また、おもしろい道樂は無いとおもふ。我れ等も、二十何年も前から、天魔に魅入られて、この念の入つた、おもしろい道樂にうき身を宴し、毎年のやうに、親類、縁者、友人達に、少なからず迷惑をかけて来たものであるが、大正三年第一次歐洲大戰勃發し、日本もこれに参加した時には、帝國劇場に於て所謂文士劇を催はし、僅少なながら恤兵部に献金した。その翌年だつたかも、市村座に、同じく文士賣家劇を開催して、その時も、諸費を節約した義金を其筋に献納した事を覚えてゐる。爾來、泰平の逸民として年々このお道樂を繼續し、人に笑はれ、そしられてゐたものだが今回の支那事變勃發と共に、國策の線に添はぬ事を痛感して、夢にも現にも、芝居ゴッコの面白さを忘れ得ぬ我等同志も、斷

然これを止めてしまつてゐるのである。  
『宣傳』が洋服を着て颯爽と歩いてゐるやうな巖太夫君である。必らずや都新聞の演藝欄にその、今募集してゐる櫻樹献金にでも……と思つて、それ以來毎朝、各種の藝人達が、或は演奏會の費用を、或は法事の金をと節約して紙面を賑はしてゐる中に、若しや、とおセツかひにも探して見ると、兜會の十周年記念の百圓は、直ぐに判つたが淨瑠璃時報も、巖太夫も見當らないのである。これは我れ等の見落しであるかも知れぬ、或は他の方面に献金されたのかも知れない。それを今どうのかうのといふ譯では無いが、さうでもすれば、まだ幾分、例のお道樂に耽つた申譯になるとおもふからなのである。  
何をぬかす！自分の金で自分が道樂をするのだ、要らぬお世話話！と申さる。ば、無論それまでの事、御免下さい、と引下る外は無いのである。(百二十億貯蓄強調週間第一日しるす)

# 義太夫論

(其日庵稿)

新 藤 泰 觀

昭和九年孟秋の候、一日詞友某を田園調布の寓居に訪ふ、机上本書の在るあり、一讀するに單なる藝術論とは雖其の眞意は蓋し義太夫節に假りて治國平天下の要道を論じ、近松竹本以下の徒を備ひ來りて國民的信條を涵養日本精神昂揚に資するものなるやに觀察せらる、則ち請ふて歸り直に筆記し書篋深く藏め置きたるものなり、現今社會主義觀頹廢加之我國不動の根本方針の完遂を期するの秋、偶々其の當時を想起し本誌上を藉りて再録し江湖諸子の清鑒を煩し聊か主義の宣傳に即應せしめんとするの微衷に外ならず、又是れ日本魂の一種の糧ともならば筆者の喜悅何物か之に如かんや。

## 一、淨瑠璃及義太夫節の始め

盛夏嚴冬の差別なく、天狗の鼻を齧めかし

て近所近邊の味噌を腐らし、有ゆる知人朋友より出入の職人下女男迄に迷惑苦痛を掛ける慘憺たる所行を働くものは、凡そ下手義太夫の外決してあらざる可きを知る。而して近來日本の全國に亘りて尊卑上下の間此の天狗の鼻を齧めかし、漫りに他の諸藝を凌駕せんとする幾十萬の木葉天狗が此の恐るべき遊藝に猛烈の勢を加へ其の餘波澎湃として他の優尙なる藝界をも蕩破し尙ほ餘燼無らしめんとするの傾向あるは時勢の推移に伴ふ一現象とは雖、其の因りて來る所の遠由を考究するも亦一の興味ある事たるを信ずるなり抑も聲曲なる者は遠く源を元暦の昔に發し、彼の後鳥羽帝の時、信濃の前司行長入道源平盛衰記より撰び抜て此の物語を作り、盲人性佛に敬へて琵琶に合せて唄はしむ。性佛山王權現に祈り、神勅によりて長短高下迅速緩急の譜節をなし之を唄ひて世に行はれしと聞く。夫よ

り遙かの後永祿年間琉球より蛇皮を以て作りたる二絃の樂器を得來りて、時の樂人石村近江之れを改作して三絃となし、十二律四十八譜の定を設け、自在に音節に合して情樂を奏し、人をして感動せしめたりと。而して其頃織田信長の侍女小野通女なるもの詞藻の道に通じ、命を受けて三州矢矧の長者の娘淨瑠璃姫が東下りの牛若丸に情逢したる事を作述したるより、之を淨瑠璃物語と名付けたりと。此文章は古今の優美を蒐め、婉麗を極めたるを彼の澤住瀧野の兩檢校之れに譜節して語り出でしより、始めて淨瑠璃の名あり、夫より段々名人諸流輩出し、薩摩淨雲、杉山丹後の椽は彼の江戸半太夫、双笠、意教等の祖にして山本土佐の椽は彼の都一中の祖にして、常盤津文字太夫に傳り、又富本豊前太夫に傳り、清本延壽太夫に傳る。而して此淨瑠璃なるもの杉山丹後山本土佐井上播摩より直統して竹本筑後の椽に至る。之を斯道の祖たる竹本義太夫となす。此人大音嬌喉一世を風動したる名人にして、主に人情の微を語り出すに悲痛を以てし、之に加ふるに菓林子近松の明文一世に涌溢して藝界俄かに旺盛を加へ、貞享寛保の間は世人此の長藝の妙處に魅せられて神

心酔へるが如し。終に此事時の天子の勅聞に達し、御椽先に召されて天聽を辱らし、奉侍の百官悉く感動して袖を絞らざる者無きに至る。主上深く其妙技を敬感あらせられ、賜ふに垂錦を以てせられ之を以て衣冠とするを許させられ、更に御攝家に命ぜられ、竹本筑後椽と任官せらる。義太夫一派の肩衣に綴子緋珍等を用ゆるの始まりにして、他藝人の同じ肩衣を着くるは僭偷せるものなりと。義太夫面目身に餘れり、終に之を農工商の民間教育の技藝たるべきの允許を蒙り、大阪道頓堀の西に矢櫓を建て先に賜ふ所の錦布を以て裝束を拵へ、竹本筑後椽の高札を掲げ西の宮の傀儡師百大夫の流を汲む練り人形の一流を追ふて芝居を興行するに至れり。即ち元祿三年庚午正月彼の長州萩の産たる近松門左衛門が蓋世の博識を以て京都に遊べるを聘し之に數百番の著述を乞ひ、益々錦上添花を散らす的の繁榮を極めたり。而して享保九年の頃、此の筑後椽の門人たる豊竹越前小椽又た拔群の妙音と優技とを以て、矢櫓を道頓堀の東に構へ驟雨砂塵を捲くの勢を以て、衝を竹本座と争ふに至りしは、實に斯界の兩雄として末世の今日迄狂言外題に東西物の別ある始元たるを知るべし。之より名人四方に湧出し、隨

つて諧節にも雄大の進歩と改竄を加へたるは今日に現存するの音節に照して最も明瞭なる事實にして恰も一諧節の改良に一人人を費して一段の外題を完成したりと云ふも誣言に非ざるべし。即ち一段の中に文彌と節あるは岡本文彌の節にして、表具と云ふは表具又四郎の節、又た説教と云ふは説教與八郎の節にして、道具屋と云ふは道具屋吉右衛門の節なり彼の林清と云ふは日暮林清の節にして播摩と云ふは井上播摩の節たるを知るべし。此の如く其一世に巨技長藝の名人が數百年間數代に亘りて、丹精と練磨とを重ねて、其深奥を極めたる妙技を無學文盲なる藝人或は我儘放埒なる素人が所謂テレホーンの口移しに少閑一二ヶ月の間に習得して直に渡し守りと呼ぶが如きダミ聲を擧げて怒鳴り散らす故、其前後左右にある者犬猫にあらざる限り、苟も人間の形を備へたる者は、忽ち惱苦の深淵に陥り遂に眩暈卒倒の重患に掛りて天壽を縮むるに至る、又當然の事に屬す。然りと雖物皆一利一害あり、此の如く精神上衛生上如何かと想はるゝ遊藝にも、其の名人が古來より人心に與へたる感化の強大なる實に驚くに耐へたるものあるを見る。余は之れより稿を追ひ、義太夫節が社會上に現映したる事實を論じ進んで古今斯道藝人の鍛練優劣如何を批評するの興味を檀まゝにせんと欲するものなり。

## 海水浴旅館

眺望湘南隨一

釣り地引網御案内

割烹旅館

## 洗心亭

電話 二一九番  
片瀬 三三三番

寄贈新刊

- ▼土▲淨曲新報▼露▼みどり
- ▼藝▼京城のラヂオ▼淨瑠璃時報
- ▼淨曲研究▼淨瑠璃月報▼風
- ▼淨瑠璃雜誌▼大日本淨瑠璃界
- ▼可樂▼文樂▼寶塚月報▼梨園
- ▼明るの家

ラチオ 浄曲漫評

金玉丸

元 文 樂 庵 「六月一日」

加賀見山舊錦繪 長局の段

竹本 土佐太夫  
絃 野澤 吉兵衛

昨年十一月、傑作『壺坂』を放送してから半歳以上の土佐翁、『長局』は翁として頗る好題目であるが、今夜聴く所によると、哀しいかな大に衰殘の風を感じしめられた。『跡見送りて襖の蔭』から、例の土佐太夫節といはうか、土佐太夫音といはうか、鼻聲にからませて、刻むやうな節尻愈よ烈しく、舞台なれば左ほどにも無き息切れも、マイクといふ飄輕者は、それを細かく聴者の耳朵に運ぶから致し方もない。尾上の自害になる前の『年端もゆかぬ心から、大事に思ふてくれる志、コリヤ忝ないぞや、嬉しいぞよ』

のあたり、如何にも苦しげに、『酒でもたべて氣を晴らし、煩らはぬ様に、第一は御奉公を』なども調子が遂に張れなかつたのは痛ましかつた。さばれ、一段を通じて、やはり、他の人に言へぬ妙味があり、自然と具はる尾上の品位も有がたく、お初の年頃や、主思ひの忠實振りも『アノ参れ、なら、参りませうが、ア、アレ御らうじませ、空合も疊つて来る』などの巧まさ、他の追従を許さぬ呼吸がある。『案じる胸も張葛籠、明けて出したる生木綿の、在所染なる紋付も、部屋方者の一張羅ンナ』あたり、人形の動きが眼に見えるやうであつた。處で、ちよつと言ひたい事は、時間の都合なるべきも、端折られた文句である。先づ初めの方の『直す草履も昨日の意恨——知らぬお初が物案じ』までや、書置きの『硯の

海のそこはかと』から、『無き長文も後や先——中結び締めて玉の緒を』までの二三枚を抜いて『今を限りの空結ひに……』へ飛んだのなどは先づ可しとするも此の上りを聴くほどの人は誰れでも知つてゐる、お初の忠臣藏の意見の條りで『おゝ夫なれば話が合ふ』から『能う見物にまわりましたが』を抜いたのや『昨日鶴ヶ岡の喧嘩の様子』云々や『御機嫌に違うても、往た振りして行くまいか……』などを飛ばし、更らに、最も人口に膾炙して肝心ともいふべき最後の『からず啼の此の悪るさ、アレ〜怪しからぬ胸騒ぎは』を抜いたのは、ほんの五秒か六秒の時間の節約で、甚だ以て其意を得ぬ事だとおもふ。次に蝶花形博士が躍起研究してをられる例の『待つ間もとけし長廊下』は、ハツキリ、待つ間も、で切つて、とけし、と續けてゐた事を書き添えておく。絃の吉兵衛師には無論文句は無く『翌日は亡き名を白紙に、硯の海のそこはかと』のあたり、巧妙を極めた撥の音を聴かせ、尙ほ危く土佐老のハツ

レかゞる處を、例のカケ聲でカムフラ―  
ジユするお手際など、先づ認めざるを得  
ない。

文樂 中堅 〔六月九日〕

### 檀浦兜軍記

―阿古屋琴責の段

庄司重忠 竹本 大隅太夫  
岩永左衛門 竹本 文字太夫  
榛澤六郎 竹本 播路太夫  
阿 古 屋 竹本 南部太夫  
絃 豊 澤 廣 助  
野 澤 吉 左  
琴・胡 弓 鶴 澤 綱 延

近頃、カケ合義太夫が、中々はやるや  
うだ。適材を適所に用ふるといふ長所は  
あるが、やはり、一人での熱演の方が實  
がはいるとおもふ。しかし、唯だ慰みに  
聴くには、肩が凝らずによるしい。阿  
古屋の琴責は、南部太夫には、今の文樂  
座の顔觸れでは、先づはまり役といふ事  
が言へる。『姿は伊達のうちかけや』の  
出から、中々よろしい。『四相をさとり

御方とは……仇口に云ひなせしが、今日  
の仰せに我が折れた』の詞も結構だが、

『同じやうに座に並んで、殿様顔して御  
座れども、いきかたは雪と墨云々』の言  
はば、啖呵を抜いてしまひ、さて、蕨組  
の一曲を終つてからの、例の『道は變ら  
ぬ五條坂、互に顔を見知り合ひ、いつ近  
付になるともなく、羽織の袖のほころび  
……』と、景清との馴れ染を物語る情け  
の道の一條も、アツサリと飛ばして語つ  
たのは、物足りなかつた。三絃の『翠帳  
紅闌に、枕双ぶる床のうち』を抜いたの  
は、御尤で、それから胡弓の相の山、巢  
ごもりで、以下駈け足の段切りと相成つ  
たが、琴と胡弓の綱延君、中々上等の出  
來であつた。大隅太夫の重忠、堂々とし  
て『鎌倉の嚴命に従ひ』など、立派を極  
めた。岩永を制して琴曲の彈奏を所望す  
る中も、よくその人に成り切つて、溫情  
を湛えてわたのを賞める。文字君の岩永  
も虎の威を藉る狐武士、憎みも利いて可  
しくである。廣助氏の絃、始終努力の  
撥捌き、大御苦勞である。

文樂 若手

〔六月十四日〕

### 増補忠臣蔵

―本藏下屋敷の段

竹本源太夫  
絃 野澤 吉彌  
箏 野澤 吉藏

源太夫氏は、昨年の夏頃、朝顔の大井  
川を放送してから、久し振りだとおもふ  
三段目語りとして、先代の源太夫が、餘  
りに巧く、且つ我等大好きの人だつた  
けに、自然、此の人に苦言を呈するやう  
な事になつて、氣の毒な氣もするが、致  
し方もない。しかし、今が勉強の仕どき  
であり、又た、事實勉強も仕てゐるらし  
く、今回の『本下』は、失禮ながら、相  
當聽かれるやうになつたと言へるのは嬉  
しかつた。放送は、後半奥庭で、「出」の  
半枚ほどは、感心しなかつたが、若狭介  
の調子は仲々可かつた。唯だ少しく間延  
びのした詞もあつて、前の本藏を責める  
イキに、たるみの出來たのは残念であつ  
たが、奥の情味などもよく出てゐて、よ

しくであつた。本藏は、或は、今一ト息ドツシリとした貫目を望む人もあるかも知らぬが、我等は、アノ程度の調子で結構であるとおもつた。柴小舟の琴唄も先づは難なく、段切りは、唯だ吉彌氏の絃樂に耳を取られて、おもしろい事であつた。言ひ忘れなが、番左衛門の笑ひも出来た方であつた事を付け加へる。

大阪 女義 [六月廿五日]

### 和田合戦女舞鶴

市若初陣の段

竹本 雛駒

絃 豊澤 住 繁

『和田合戦』は、大阪方面では、よく語られるやうであるが、東京では殆んど出ないものである。文樂では、土佐さんが一兩度演じた事があると覚えてゐる。芝居の方でも、久しい前、故人の屋上多見藏が東上して、左團次一座へはいつて、本郷座で見た後、たしか大歌舞伎では出ないやうである。巴、板額といはれる例の女豪傑が、一子市若の初陣に當つて

荏柄平太の幻影を見る風に裝つて、我が子をたばかり切腹をさせ、お主の身替りにするといふ皮肉なもので、相當、力量のある人でなければ語れぬものとおもふさて、當夜の雛駒さんだが、我等耳馴染の薄い人、どうあらうかと、危ぶみながら、スキッチを入れたのだが、素語りであり、殊にマイクを通しての、この皮肉な板額の苦衷を聴者に徹底させるには、可なりの距たりがあつたのは已むを得ぬ所である。けれど、筋だけは相當に通つて、よく解り、且つ、市若の健氣な哀調が、存外に勝れてゐたので、結構語り物になつたとおもつた。荏柄の幻影、幻聲を聴くあたりは、筋を知らぬ聴者には到底理解出来ぬのは、致し方もない。聲調の確かな、向うへ出る口捌き、女子因會でも相當な人であらう。住繁さんの絃も慎しんで弾いてゐて、無事とでも申さうか。

×

×

×

## 讀者倍加運動

最近本誌愛讀者の増加致しました事は素暗らしいもので、弊誌が想外の好評を博し、全国各地は申す迄もなく遠く海外在住の皆様より陸續と御申込みを願ふ様になりましたのはつまり我々義太夫界が吾社の目的に合致してゐる事を欣ぶ次第であります。

就ましては此際讀者倍加運動を起し、皇記二千六百年を記念に、より一層の進展を致したいと存じます。それには皆様の御援助を俟つ事は申す迄もなく、御一名一人づゝ新讀者を御紹介賜りますれば、今までの千名の讀者が忽ち二千名となりますわけで何卒此の讀者倍加運動に御助力の程を偏に御願ひ申上ます。

太 棹 社



## 栗原千鶴氏

栗原千鶴氏を聴いたのは今でも記憶してゐるけれど、數年前報知新聞が主催した東西素義決勝の時、氣魄烈々として胸を打つ「岸姫松戀鑑」飯原館の段を聴いたのが始めてであつた。

從來私は千鶴氏の技藝の迫力と心魂の鋭烈さに懾らず感服させられてゐる、斯界で氏程充實して溢く錆びた熱魂精緻玄人の如き淨瑠璃を語る人はないと思ふ、と同時に氏の淨瑠璃の玄人張りの素義人がともすれば陥ち入り易い玄義の模範的なナリセが全くない、型を守り型を究極しながらも鮮烈に自己の個性を躍動させる語り口が心魂に迫る卓抜な特異性を持つてゐる。若輩な私は氏の語り物を數多く聴いて居ない、にも拘らず、其の一つ／＼が胸に喰ひ入つて印象深く存在してゐる。

小手先の技巧を用ひずに堂々腹でエグつて行く力、強い男性的な一種の迫力に獨得の眞銳性があつて、全段に緊迫した氣魄と充實した滋味をどつしりと漲らせて行く。僅かに繊細な柔軟性と豊麗な圓味とが求められないが大棒の牙えた音締と藝格は義太夫藝術の重厚な特質を精妙に渾現する。淨瑠璃の急所を全心的にエグリ込んで行く氣魄の鋭さと充實した巧さは壓倒的だ。こうした演出は氏の獨壇上で他人の企及し難い藝格の深さと錆びた逞

ましい熱魂を所有してゐる。

氏は唄つて唄はず、語つて語らずと云ふやうな皮肉で難しい個性により長所が發揮されて光彩を放つ。高潮して行く熱調がガツシリと心魂に喰ひ入つて淺弱に亂動したり、上づらない語り口が含蓄と底力を持つてゐて、精緻に眞魂を脈動させて表現する迫力的な充實性が獨自の傑技である。

只時として溢い錆びた鋭さが微すかに邪魔してしと／＼した柔軟美を望みたい個所もある。

## 素義人描影

内田 富太郎

るが、一見艶味のないやうに感じさせるあの錆びた聲調の中に鍛錬されたハリのある艶が仄しく流れてゐる。氏の淨瑠璃は誠に堪能させる義太夫である。

## 河野國聲氏

もしも斯う云ふ詞が許されるとしたならば私は河野國聲氏の淨瑠璃を智性の義太夫と名付けたい。氏の持つ優秀な理智性と精緻な心理性はよく其の繊細巧緻な技巧と階調を保

つて渾然たる藝格を生んでゐる。

氏の持論は、淨瑠璃は崩下げてしかるべきもの……と聞く、情の義太夫を理智に語り乍ら弊々と胸に迫り聽客の心をつつのは其の深い心理把握への迫力と的確な表現力の優秀さに基因する。

而しともすれば理智の藝術と云ふものは心理の剔抉と云ふ點では他の追隨を許さないが鋭い寫實性に往々に情態美と色彩が塗り潰され杞憂があるが……氏の淨瑠璃は深巧な理智性を持ち乍ら、潤いと圓味のある柔軟性がある爲めに、しつと巧き情韻とふくやかな氣品を流露させることに役立つて時代世話共に織巧にこなして行く。しかし古叙の藝術を最高目標として精神する氏だけに、巧緻な「堀川」の如き完成品もあるけれど、全體的には時代物に「より」個性が躍動する。コセつかずにゆつたりと而も細緻に表現する腕は誠に非凡だ。只臭く語り度くないと云ふ淨曲信念がある「晴の世界」を陰影的に

描き出されぬ恨を仄かに感じさせる。堀下げれることは強ち臭く語ることではない。卓抜な心理把握と精妙な心理表現に卓伎を持つ氏が明日への課題として淨曲の「錆の世界」を如何に表現して行くか考究して戴き度いと思ふ。

氏の傑作としては「六十」「六段目」「堀川」「壺坂」が最も印象を擧げた。『「鮎屋」「寺子屋」を擧げたい。』

ほの／＼とした氣品ある淨瑠璃を語ることは、人物の心理描寫の巧緻さに於て、國聲氏は誠に素義界稀に見る豊かな明日の世界を持つ優秀な藝格の所有者である。



## 第六回 淨雲會大會

一時休會を續けてゐた若手會は、同會を基礎として東都素義界の中堅を加へ新らたに會を組織し、豊竹古靱太夫師より「淨雲會」と名命をうけ、二月十二日文化俱樂部に於て華々しく復活の第一聲を擧げた同會は、川口子太郎氏方に事務所を置いて毎月例会を催し、何しろ三十五歳迄を會員として會の明朗性を期し、質實ともに俱はる會員諸氏の熱演は非常な好評を博し來つたが、猛夏の七月廿五日午後一時より、雷門並木俱樂部に於て左の番組に依り大會を開催する事になつた

車引(時平公、文盛。松王、義昌。梅王、都昇。櫻丸、子太郎。杉王、其角)絃(和孝)合邦(高尾、吉和)太十奥(其角、松四郎)組打(晋水、和光)寺子屋(義昌、駒登太夫)太十前(光玉、佳照)酒屋(都竹、都太夫)三代記前(文盛、桑造)同奥(子太郎、和孝)安達(一司、蟻鳳)岸姫(美津豆、和光)新口(中次、和孝)蛸屋(柳光、佳照)十種香(都昇、都太夫)忠七(由良之助、其角)力彌、中次。重太郎、子太郎。彌五郎、一司。喜太八、都竹。九太夫、晋水。伴内、美津豆。おかる、光玉。平右工門、文盛)絃(桑造)

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。

▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。

▽特種の催はしの外前置きを略します。

—記者—

## したしみ會

六月廿九日夜神樂坂相互俱樂部に催ほしたしたしみ會は、七月八日西町會館に於て左の番組に依り開催する事になつた。

野崎(清子、雷糸)太十(吳羽、米翁)先代(和勢、龜造)竹の子(華笑、勝八)

## 素淨曲研究會

第廿二回を六月廿二日午後六時半より麴町公會堂に於て開催。

辨慶(義昌、駒登太夫)酒屋(英、綱助)辰橋(山生、鹿重)宿屋(素八、素一)

なほ研究座談會の第二回を六月廿九日正午より四時迄日比谷三信ビル内東洋軒で催ほし、課題としては澤九似氏提出の「義太夫各段の風格」小島古清氏の「語り手と批評家の關係」岡田蝶花形氏の「待つ間もとけし、厄ふしの發音」其他席上出題に依て討論があつた。

# 大日本素人淨瑠璃會成績

既報の如く大阪に於ける大日本素人淨瑠璃會の第九回競演大會は、五月廿四日より四日間四ツ橋文樂座に於て開催し、大盛會裡に終演をつげたが、審査の結果は左の通り。

- 槽(一八二、五) 利生(一八〇、三) 生樂(一七七、七) 瓢樂(一七四、〇) 重司(一七三、八) 小若(一七一、八) 義鳥(一六四、五) たつみ(一六三、三) 貴道(一六二、三) 登一(一六二、三) 鶴笑(一五九、八) 千鳥(一五八、三) 紫幸(一五七、七) 泉(一五六、八) 鶴峰(一五四、七) 紅司(一五〇、八) 松鳳(一四九、八) 三樂(一四九、七) あさひ(一四九、五) うろこ(一四九、三) 榮四(一四八、二) 小富士(一四七、八) 花昇(一四七、七) あしべ(一四二、七) 里昇(一四一、二) まつ尾(一四〇、〇) きく水(一三八、八) 白水(一三七、七) やまと(一三四、五) 華遊(一三四、五) 十九壽(一三二、〇) 金鳳(一三一、八) 淡路(一三一、八) 住之助(一三〇、五) 藤政(一三〇、三) 萬華(一三〇、〇) 晴山(一二八、七) 小昇(一二八、五) 一蝶(一二八、二) 雷子(一二八、二) 長生(一二六、八) 眞勝(一二六、八) アリオ(一二六、八) 大和(一二六、三) 離鶴(一二六、〇) 一枝(一二五、〇) 大彌(一二四、八) 東升(一二四、七) 松呂(一二四、七) 駒平(一二四、五) 榮糸(一二四、五) 貴昇(一二四、三) 三升(一二四、三) やなぎ(一二三、五) 寸馬(一二三、三) 白水(一二三、二) 華峰(一二二、八) 貴雀(一二一、五) 吟青(一二〇、八) 和鳳(一二〇、五) 琴城(一一九、八) 老若(一一八、八) 芳玉(一一七、二) 十九集(一一六、三) ナゴン(一一四、五) 山玉(一一四、三) 米友(一一三、七) 花月(一一三、五) 錦(一一三、二) 榮鳳(一一二、三) 鐵洲(一一二、〇) 美はらし(一一一、八) 大鏡(一一〇、七) 仙昇(一一〇、五) 猿昇(一一〇、三) 柳司(一〇九、五) 小松(一〇九、二) 稻駒(一〇九、〇) 暫(一〇八、三) 標那九(一〇七、八) 喜昇(一〇七、三) 都華(一〇六、五) 豊(一〇六、三) 小里昇(一〇五、〇) 麒鳥

## 桑港の義太夫會

桑港には杉山陶岳氏を始め、西本西紫、兼廣廣玉、武榮玉、平野一昇氏等の外相當語り手もあり、師匠に乏しい憾みの中に去る三日仁田義豊氏の絃で佛教會日曜學校に於て久々に義太夫會を催ほした。

鳴門(小富)紙治(義晃)酒屋(氏要)寺子屋(陶岳)壺坂(ほかく)

## 竹水會

元鶴澤六兵衛師(故人)を師としておた平市の若葉會は、其後鶴澤蟻鳳師の出張稽古に依つて益々鍊磨精進して居たが、今回會名を「竹水會」と改稱し、花びし會、蟻鳳會後援のもとに六月廿二日午後六時半より同市公會堂日本間に於て賑々しく温習會を催ほした。

鈴ヶ森(美代子、喜美太夫) 柳(喜福、喜美太夫) 合邦(才司、喜美太夫) 鮎屋(ひさこ、蟻鳳) 酒屋(錦祥、蟻鳳) 陣屋

(一〇五、〇) 政宗(一〇三、八)舟樂(一〇三、三)〇大(一〇二、五)萬鳥(一〇二、〇) 武田眞若(大阪)

龍昇(一〇一、三) 鳴門(九九、三)呂角(九八、二)東和(九八、〇)貫昇(九七、八)萬兩(九七、七)三絲(九七、七)一港(九六、五)

雷鬼(九五、二)春洋(九四、七)春清(九三、三)陸(九三、〇)日石(九二、二)梅龍(八八、二)都號(八五、八)

無審查出演 細川清(東京)小林うろこ、入賞 一等(福田里昇)二等(久彌田淡路)三等(阪本藤政) 賞狀(酒井〇大、上田柳司、洲崎麒鳥) 三役賞 東大關(奥田利生) 同關脇(野口生樂)小結(加藤重司) 西大關(澤田金聲) 關脇(橋本瓢樂)小結(木の本小若)

## 南北座人形淨瑠璃『九臯會』

九臯會第五回は歸還兵慰勞の會として

南北座人形入にて七月三日午前十時より

日本橋三越ホールに於て開催。

晴、團市)

式三番(南北座) 忠六(樽、鶴助)儀作(吞

## 邦樂協會創立發會式

技藝者の許可證交附で邦樂協會を創立

し、此新規則を七月一日から實施する事

になつた警視廳では、七月十日日本橋俱

樂部に於てこれが創立發會式を舉行した  
が、義太夫部では日本義太夫因會及び歌

舞伎義太夫聯盟にて役員銓衡の結果左の

諸氏がそれ〳就任する事に内定した。

因會側 長老、部長(鶴澤觀西翁)長老、

副會長(豊澤猿之助) 監事、理事(豊竹巖  
太夫) 副部長、理事(竹本東太夫) 理事(竹

(東京矢口巴、蟻鳳) 寺子屋(夏井、ひ  
さし)

## 因女子部後援會

同會の第六回演奏會は七月廿八日午  
後二時半より雷門並木俱樂部に於て開  
催。番組左の通り。(八月休會。第七回  
は九月廿八日)

船別れ(佳世子、佳仙) 松王屋敷(吉彌  
彈語り) 新口(越駒、紋致) 先代(巴駒、  
巴住) 酒屋(昇登、巴住) 中將姫(清司、  
猿玉) 壺坂(彌周、三生) 逆槽(重子、勝  
八) 酒屋(佳若、清一) 安達(素昇、猿玉)  
凌町(團雀、清二) 寺子屋(駒龍、津賀  
昇) 蝶八(和佐の助、猿女)

## 第七回 若女會

七月一日午後六時より雷門東橋亭に  
て開催。次回は同十五日。

日吉(素國、素丸) 合邦(素八、素一) 酒

本都太夫、豊澤猿藏) 評議員(豊澤芳太郎、豊澤猿三郎、鶴澤新造、野澤条造) (竹本鏡太夫) 理事(竹澤仲造) 評議員(竹女子部) 理事(竹本素女) 評議員(鶴澤清一、竹本佳照、竹本素昇、鶴澤紋致、豊澤八重造、鶴澤市作、豊澤猿七) 澤猿玉、竹本若好)

## 映畫に人形淨瑠璃

松竹の白井、大谷東西兩社長の發案で三宅周太郎氏がその責任監督者となり、太夫三味線人形の元老の舞台を世に残し一つは人形淨瑠璃を大衆に普及するといふ趣旨で、文部省もこれが後援に乗出し、文樂座人形淨瑠璃を映畫化する事は既に新聞紙上に詳細を報道された通りである。

### 新潟・佐渡 芳河士

新潟は雨に烟るや夏夕  
雲垂れて佐渡は見えずに土用波  
港近く唄も聞かせて船涼し  
人形師死して後なし明易き  
山々の雲の往來や青田風

屋(昇登、巴住) 辨慶(素次、駒清) 沼津(素昇、猿玉) 太十(素廣、駒登久)

### 故神馬源太郎氏七回忌

#### 『菩提心』發行

神馬里芳氏の令息源太郎氏は昭和九年六月三日永眠、駒込吉祥寺に於て盛大な告別式が行はれたが、遣子禧子さんは五年、喜代子さんは三年、厚子さんは二年、いづれも康やかに深川平久小學校に通學されてゐる。本年は七回忌に相當するので、故人を偲ぶよすがに『菩提心』と名づけた小冊誌を印刷して故人の學友、縁者知人へ配布された。同誌は父君神馬千代吉氏の愛語、追懷を始め、永別(墨交會記)久遠のたび(數矢同窓會、高工同窓會)及び如是相(故人日誌の一節)を掲げ、日本紙に印刷純和製にて奥ゆかしい上品なものである。

# 浄界消息

## ▼義大夫古曲發表會

第三回を十月

十一日並木俱樂部に開催する事に決定。出し物は「日蓮記」通しにて、この道行きは東都では初演であり、大阪でも餘り出た事がなく、豊澤芳太郎師が父松太郎師から傳授されたもので、會員一同日下猛稽古中である。

## ▼素義國技會

男流女流の區別を廢し

て合併競技する事に改め、七月十日日本橋俱樂部で開催、出演者は鳳、五口、柳光、一義、光玉、上誠、東光、高尾、旭叶、うつぼの諸氏。

## ▼三好會の森三好氏

五月三十日午

込肴町勝岡演藝場に於ける勝治身振劇に出演。「先代」を語つて好評を博す。九月は同所にて十種香及び日吉丸を上演の筈

## ▼竹翠會

竹本素昇連の向島竹翠會は

六月例會を二部に分けて上旬と下旬に催したが、七月は盆過ぎに二日續きで開催

する事になつた。

## ▼女天會

先月並木俱樂部で大會を開

いた女天會は本月の例會を二、三の二日間文化で催ほした。

## ▼五聲會

五聲會は七月十五日並木俱

樂部に開催する事になり、今回は客員として鈴木松實氏が鶴澤觀西翁の絃で出演される。

## ▼東都杏義會

前號に詳細を報じた日

本醫師素義聯盟の杏義會は七月十四日夕より電氣俱樂部に開催。

## ▼山下孝次氏追善

豊竹若千代師の

息山下孝次君(陸軍工兵伍長)は、十三年十二月應召、勇猛果敢、壯烈なる敵前上陸二十數回を數へ、遂に處安徽省銅陵縣大道大王廓クリークに於て護國の華と散つた。湖月氏を始め若干代会連はその三周忌に相當する六月廿二日午後一時より並木俱樂部に於て追善義太夫會を催ほし千振、いろは、旭、喜鳳、巴雀、叶、神風、鬼玉、久子、乃菊、昇、翠松、叶昇喜聲、一幸、司、百塚、菊水、小喜久、

登盛、可松、盛鶴氏等が出演した。

## ■豊澤新次郎師追善

五月十一日死去

した豊澤新次郎師の追善義太夫會は、黒川叶氏發企にて六月廿六日午後一時より並木俱樂部に於て開催。

## 皇風厚生莊々歌

中野三允作

人の性、相模の野邊に見遙かす 富士が  
根凌ぐ 意氣を以て 吾等あるなり學び  
舎に

江之島片瀬ついでここに 七里濱が濱に打  
つ波も 鎌倉山の夜嵐も 懐古の情は限  
りなし

豊葦原千五百秋の瑞穂の國に昇る旭に  
八紘治ねく光被すと 知れば吾等の血は  
躍る

三種の神器天壤と 共に無窮に傳はれ  
る現人神の聖明を いたゞく吾等日本  
に生れたりしを誇りとす

勉め勵まんもろ共に 鍛へて身をば眞金  
とし 磨きて心璧とせん 次の時代の日  
本を 擔ひてぞ立つ重き任 強き信念胸  
に湧く

後本誌名譽會員

(イロハ順)

(東京之部)

緒保安安小吉安中佐北菅菅橋阿櫻吉宮鈴木廣  
 方々藤藤川田藤澤藤島田原本部井川原木村瀬  
 千長都都都登く之北梅葉梅呂浪與一一ろ  
 晴平昇竹山盛ろ巴助斗笑光月一光補子信司は  
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

大高黒西高加飛鈴青林小鈴本林岡神松岸久栗  
 用山川田橋石木山林木木本馬本米原  
 大嘉和可可な和和和和和大林柳里千竹中千  
 津子叶松遊兜め勇狂勢舟樂熊昇光芳鳥史次鶴  
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

長松岡國山本石中乃萩宮小川新坂杉野根小井疋田小  
 谷林田井下城川野村原本埜口川倉山田本林上田口森  
 川福彌や彌冠華吳乃つ武と太月素高團二大辰叶  
 久笑聲氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏  
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

平齋木寺奥藤中柳及大堂寶岡山保湯田松河原永安鈴川  
 藤村岡村牧川川築野藏崎崎谷淺中岡野田戸藤木田  
 井さ山か三三淡愛有鐵天円向紅光湖語國越光兒三  
 榮生之幸玉路氷明旭葵幹昇六陽司玉月松聲巴壽樂雀樂  
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏



高岩保三山吉岩澤三增增乾橋平歸前日星淺錦金細藤橋  
 瀨田坂並田良木部浦田田 本井山島野野田 田 田 川  
 末有義義蟻義其鏡喜喜 桔 掬軌世貴金桔奇 錦 金 三 三  
 操成曲昌昇若雀角鳳香城梗月外花昇泉梗聲松鳳清壽司  
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

平高武打濱倉田山平花菊勝小鈴須村高吉池北野橫吉  
 山品笠矢口田口田井房池田原木田上橋田田村口井田  
 平一宏晋秋司司壽壽紫秋松松松美津宮三三三 な 三 地  
 茶重亮水華樂重瓢樂蝶月雨樂寶義豆古芳國葵と由句  
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

下關 船橋 大垣 神戸 大阪 同 同 同 同 米國 (地方之部) 仁 關 時 沼 富 塚 近 白 松 魚 池 桑  
 保良 川奈部銀司氏 岡田 鶴峰氏 西本 西紫氏 兼廣 廣玉氏 杉山 陶岳氏 武野 榮玉氏 平野 一昇氏 木口 靜香氏 翠松氏 關口 靜史氏 時田 盛鶴氏 沼井 生昇氏 富岡 清雀氏 塚口 清華氏 近江 清華氏 白井 清華氏 松岡 里雄氏 魚崎 美福氏 池田 美尙氏 桑原 美峰氏

新名譽會員

~~~~~  
 橫濱 和田 朝氏  
 同 霜島 錦司氏  
 同 鈴木 吞笑氏  
 同 田中 吞笑氏  
 松戸 木下 松玉氏  
 平塚市 國森 鳴門氏  
 八幡 古賀 大彌氏  
 安東市 岩崎 山彦氏

藤牧 淡路氏  
 鈴木 一信氏  
 藤田 三壽氏  
 橫濱 田中 吞笑氏  
 松戸 木下 松玉氏  
 本誌後援名譽會員を御快諾  
 賜り難有奉深謝候

太 棹 社

# 當座帳

▽近江清華氏 澁谷區穩田町二丁目三二番地に轉居。電話青山一五五二番。

▽佐野美昇氏 澁谷區幡ヶ谷原町九二四番地へ轉居。

▽松岡語松氏 陸軍へ十萬圓海軍へ五萬圓獻金。

▽金井辰稻氏 吉原角町の店を廢業。

▽熊取谷保雄氏 故竹内たもつ氏の念息保雄君は六月十一日出征。

▽豊澤宗之助師 古曲發表會へ入會。

▽鶴澤絃内師 同上。

▽竹本素女師 病後九里濱に靜養。

## 訃報

馬場孤蝶氏 永々肝臟病にて六月廿二日午後三時十分遂に永眠。享年七十二。

加藤こま殿 加藤清二郎氏母堂こま殿は六月廿五日午前十一時五十五分永眠。

廿九日午前十時より郷里新潟縣白根町にて告別式を執行。

松本きく殿 竹本駒若師母堂きく殿は永々病床にあり、遂に六月廿一日午前五時五十二分永眠。廿三日下谷北稻荷町宗源寺に於て告別式を執行。

謹んで哀悼の意を表す。

# 編輯後記

★前々號から毎月十日發行に改めました。印刷所の手不足やら紙の入手に困難やらで兎角延刊勝ちにて申譯がありませぬ。

★前號などは表紙の紙が無くて、御覽の如き紺屋の麴から出たやうなのが出来ました。表紙の色が濃厚の爲めに當座帖、訃報、編輯後記などは本を斜すにして一寸加減をしなくては讀めないといふ有様でした。

★宮尾しげを氏から「人形のいろく」といふ文樂樂屋圖繪が二頁分御寄稿に預つてゐますが、文樂東上の來月號に掲載する事に致しました。なほ西村游史氏の玉稿も又々順送りに次號となりました。同氏の御諒承を願ひ上げます。

★次に前號にもお願ひ致しましたが、別掲讀者倍加運動に何卒御助力の程をお願ひ申上ます。

★そろそろ猛夏に向へます、皆々様の御健勝を祈ります。 一芳 河士

(行發日十回一月毎)

## 號六十百第

|   |     |        |      |    |
|---|-----|--------|------|----|
| 定 | 一部  | 金三十錢   | 郵税   | 三錢 |
| 價 | 六月分 | 金一圓八十錢 | 郵税   | 共  |
| 廣 | 一年分 | 金三圓    | 郵税   | 共  |
| 告 | 通   | 一頁     | 金貳拾圓 |    |
| 料 | 別   | 一頁     | 金參拾圓 |    |

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます  
▼誌代は總て前金御拂込の事  
▼なる可く振替に御送金の事  
▼郵券代用は一割増但三錢切手の事

昭和十五年七月八日印刷納本  
昭和十五年七月十日發行

編輯兼 發行人 富取 壽鹿

東京市牛込區早稻田町五八  
印刷人 栗原 榮松

東京市牛込區早稻田町五八  
印刷所 栗原印刷所

電話牛込一四五一番

東京市小石川區音羽丁目一

發行所 太 棹 社

電話東京三一七八五番

# 帝都素義名鑑の延刊に就て

弊社が「帝都素義名鑑」の發行を企てました處、御賛同を賜り多數の御申込みを得ました事は誠に難有御禮申上ます。

ところで、此の發行の遅れましたことは、早く御申込みの方々には何んとも恐縮に堪えません。弊社も又これ程に延刊するとは思はなかつたのですが、取りかゝつて見ると中々むづかしく、それに折角企てました事でもあり、今後の發刊は十年二十年後淨曲界の一變した上でなくては出来ませんので、此際お一人も多く洩らさじといふ念願から、メ切も附さずに皆様は勸誘申上げておました處、後からメと續々の御賛助御申込みに接しますので、遂に慾も手傳つて延刊といふ有様、昨年からお申込みを賜り未だ御寫眞の拜借出来ぬ方々も澤山ありますが、外の事とは違ひ強請する事もありませんので、何卒お早く御撮影下され御貸與の程を願ひ上げます。

なほ此際何卒御誘ひ合はされ弊社の此の記念事業の御援助を賜り度偏に御願ひ申上ます。

紙もだん／＼高値を示し定價も計畫當時のものでは困難を生じますので、いづれ今後はメ切を附して發行を急ぎ度く存じますが、メ切後の御申込みは一冊十五圓或は十七圓の定價となる事も止むを得ないと存じます。

(太 棹 社)